

# Herkhuf のコピトとピグミー

## —エジプト学における研究の概要—

北 西 功 一

The dwarf of Herkhuf and the Pygmies:  
The review of the research in the Egyptology

KITANISHI Koichi

(Received September 27, 2013)

### はじめに

中部アフリカの熱帯雨林に住んでいるピグミーについて書かれた本には、その冒頭部分で、古代エジプトにピグミーがやってきた話が紹介されていることがよくある。その詳しい内容については別稿（北西，2013）に譲るが、「今から4000年以上前に、古代エジプトの王のもとに樹木の国から神の踊り子であるピグミーが連れてこられた」というものである。

多くの著者はこの話を歴史的な事実として述べている。確かにこのような話はヒエログリフの碑文に残されている。しかし、その内容は、現在のエジプト学研究から見ると、いくつかの点で間違いが見られる。その間違った話がピグミー研究者によって再生産もしくは再構成され続けてきた。

本稿ではエジプト学におけるこのヒエログリフの碑文の解釈の研究史を紹介する。これによって、この碑文の内容と解釈について、現在までの研究でわかっていることを示す。この碑文にはいくつかのキーワードが存在している。まずは、彼らそのものを指す単語 *dng* である。これは本当にピグミーを意味しているのだろうか。「神の踊り」といった単語もある。また、「樹木の国」や「霊の国」といった地名が出てくるが、それらは本当にその解釈で良いのか、そしてその場所はどこなのかということを書いていく。

ピグミー研究者の間で間違った話が広まったのは、その分野の専門的な文献をきちんと読まずに他のピグミー研究者の記述を鵜呑みにしていたことによる。私自身も自分で調べてみるまではピグミー研究者に広まっている話を信じていた。私自身がエジプト学者の研究を調べることができたのは論文や本の検索がインターネットで簡単に行えるようになったことが大きい。それができる前は門外漢にとって他の分野の文献を集めることは困難であり、そのような間違った話が広がるのも仕方のないことだったのかもしれない。

本稿はピグミー研究者による上記の話を語られ方を分析する上での前提となるものである。北西（2013）と一っしょに読んでいただくと幸いである。

### 1. Herkhuf の碑文

この話のもとになっている碑文の主人公の Herkhuf は、エジプト古王国の第6王朝のファラオ Pepi 二世（在位は紀元前23世紀から22世紀ころ）の時代の政府高官で、上エジプトの統

治を任されていた (Dasen, 1988 : 258-259)。彼の墓は現在のアスワンのナイル川の島 Elephantine にあり、1885年に発掘が始まった (Breasted, 1906 : 150)。彼は南方に4回の探検を行っており、最後の4回目が Pepi 二世の治世の二年目で王が7、8歳のころにあたる。この最後の探検において、Herkhuf は南方でコビトを見つけ、彼を連れて帰るとい手紙を王に送った。その返事として、王が彼に出した手紙の内容が彼の墓の碑文に残されている。これは彼にとっては偉業であり、永遠に残すべきものとして墓に刻まれている (Maspero, 1894 : 396)。

この碑文の解読を最初に行ったのはイタリア人のエジプト学者 Schiaparelli で、1892年に出版された彼の本で分析されている (Schiaparelli, 1892)。彼の解読した文章は19世紀末から20世紀初頭にかけて多くの人に引用されているが、彼の翻訳には欠けている部分が多々ある。ヒエログリフの文字での原文はドイツ人エジプト学者 Sethe の *Urkunden des Alten Reichs* が1903年から何回か版を重ねて出版しており、その第1巻の128-131ページに載っている (Sethe, 1933)。ここで紹介する文章はアメリカ人エジプト学者 Breasted が1906年に Sethe の文章をもとにして翻訳したもので (Breasted, 1906 : 151, 159-161) ある<sup>1)</sup>。

碑文の内容 (『』の中は Breasted がつけた表題である)

『日付と前置き』

王印 2年<sup>2)</sup>、最初の季節の第3の月、15日

唯一の仲間で儀式の司祭でありキャラバンの指揮者である Harkhuf への王の命令

『Harkhuf の手紙へのお礼』

私は、そなたが宮殿つまり王に送ったこの手紙の内容について書きとめた。それは、そなたが率いている軍隊とともにそなたが Yam から安全に下ってきた (Breasted 注：ナイル川を下ってくるといこと) ことを、ある人 (Breasted 注：王の遠回しな言い方) が知ったかもしれないためである。そなたはこのそなたの手紙の中で次のことを述べている。それは、Imu の女王である Hathor が、永遠に生き続ける上下エジプトの王 Neferkere<sup>3)</sup> の ka<sup>4)</sup> に与えたすべてのすばらしい贈り物を、そなたが持ってきたということである。そなたはこのそなたの手紙の中で、そなたが霊の国から踊る神のコビトを連れてきたこと、そして、そのコビトは神の宝物管理人 Burded<sup>5)</sup> が Isesi<sup>6)</sup> の時代に Punt から連れてきたコビトのようであったと、述べていた。そなたは、私の陛下に、「Yam を訪問した他のいかなる人によっても彼のような人が連れてこられたことはこれまでなかった。」と述べている。

『Harkhuf の報奨』

毎年、そなたは王が望み称賛することを行っている。そなたは、そなたの君主が望み称賛し命令したことを行っているキャラバンに、昼も夜も費やしている。彼の陛下は、そなたの多くの優れた名声を、永遠にそなたの息子の息子のための装飾とするだろう。だから、すべての人たちが、私の陛下がそなたのためにしたことを聞いたとき、次のように言った。「唯一の仲間である Harkhuf が Yam から下ってきたときに、彼の王が望み称賛し命令したことを行うために彼が示した用心深さによって Harkhuf に対して行われたことのようなことがあるだろうか？」

『王の命令』

北に向けて宮殿に直接やってこい。そなたは、そなたとともに霊の国から生きたま元気で健康な状態でコビトを連れてくるだろう。それは、永遠に生きる上下エジプトの王 Neferkere の心を楽しませ喜ばせる神の踊りのためである。彼が船でそなたとともに下ってくるとき、優れた人たちを任命し、船の両側で彼の近くにいろようにしろ。彼が水に落ちないように注意しろ。夜、彼が眠る

ときには優れた人を任命し、彼のテントの中で彼のそばにいるようにしろ。一晩に10回検査しろ。私の陛下はこのコビトと会うことを Sinai と Punt の贈り物よりも望んでいる。もしコビトが生きのまま元気で健康な状態でそなたとともに宮殿に到着したなら、私の陛下はそなたのために、Isesi の時代に神の宝物管理人 Burded のために行われたことよりもすばらしいことをそなたに行うだろう。それはこのコビトに会いたいという私の陛下の心からの願いのためである。

新しい町の長、仲間、高位の予言者に対して、すべての貯蔵庫のある都市とすべての神殿で、出し惜しみすることなく彼に食物を提供することを命ずるために、命令が送られた。

## 2. dng

まず、コビトである。この単語はヒエログリフでは図1のように表記されている。5つの文字からなっており、左の上、左の下、真ん中の上、…という順番で読んでいく。左上から順に「手」、「さざ波」、「土器を置く台」、「耳」、「コビト」を表している。ヒエログリフはほとんどが表音文字（しかも子音のみ<sup>7)</sup>）であるが、一部は同音異義語の意味を限定するために発音しない文字が用いられ、これを決定詞と呼ぶ（松本, 2012: 53)。図1の5文字のうち、最初の3文字は表音文字で「手」は「d」、「さざ波」は「n」、「土器を置く台」は「g」の音を表している。「耳」と「コビト」の文字が決定詞である。

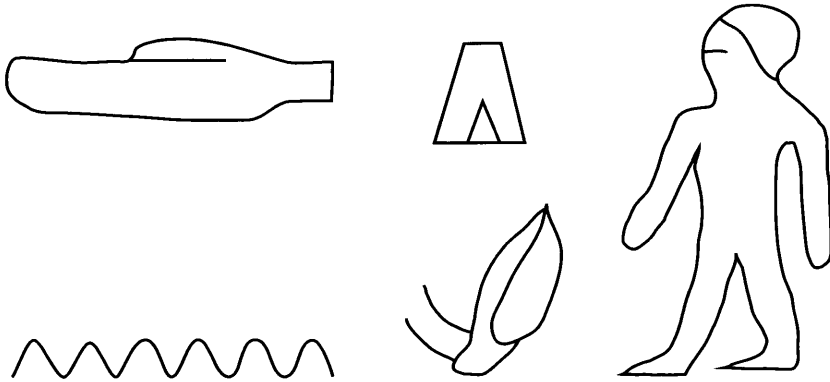


図1 dng (ピグミー?) 出典 Maspero (1893: 429)

ここで問題となるのは「コビト」の決定詞である。これがコビトを表すとされた理由は、相対的に大きな頭部と長い胴、短い脚というプロポーションである。このプロポーションは小人症の人たちに多く見られるプロポーションであり、小人症の人を指すと考えられている nmw などにも決定詞として用いられている (Dasen, 1988: 258-259)。そのため、これが体の小さな人を示す決定詞であることは疑いない。

問題はこれがピグミーを表しているのか、小人症の人たちを表しているのかということである。Schiaparelli は彼らをピグミーと推定しており (Schiaparelli, 1892: 30)、上記の翻訳の著者である Breasted も上記の文章ではコビト dwarf という単語を使っているが、その2年後に出版されたこの話を取り上げている著書では「アフリカ内陸部のピグミー部族」と述べている (Breasted, 1908: 126)。

1900年前後のほとんどの研究者がこの体の小さな人をピグミーであると考える中で、それに異を唱えていたのは当時のエジプト学の第一人者の Maspero である。彼が問題視したのは決

定詞が小人症の人のプロポーションであり、ピグミーはこのような極端なプロポーションをしていない（ピグミーは通常のヒトのプロポーションに近い）ということである。Maspero は dng がピグミーであるという積極的な証拠は見いだせないと述べたとされる（Smith, 1905 : 426）。現在でも、南方の地域の小人症の人たちである可能性があると主張する研究者もいる（例えば、Klieman, 2003 : 14）。

ただし、研究者のほとんどは、dng をピグミーであるとし、決定詞が小人症の人のプロポーションで示されているとしても、それが体の小さい人たちすべてを指すということは十分にありうると考えている。古代エジプトの dng についてかなり頻繁に引用されているイギリスのエジプト学者 Dawson (1938)、エジプトのエジプト学者 El-Aguizy (1987) では、dng が当然ピグミーであると説明している。一方、1980年代に医学と考古学を組み合わせた研究をおこなったフランスのエジプト学者 Dasen は、決定詞のプロポーションと小人症の人のプロポーションを比較して、決定詞のプロポーションが軟骨形成不全症の人のプロポーションであることを明らかにしている。彼女はこの決定詞が均整のとれたプロポーションの人たちを含めて体の小さな人たちを表していることは十分にあり得るとしているものの、「dng がピグミーである可能性は高い」と述べており、断定はしていない（Dasen, 1988 : 259-260）。

### 3. dng の評価

ここでは dng がエジプト人にどのような評価を受けていたかを考える。まず明らかなのは、dng が稀な存在、そして特別な存在であることがあげられる。Isesi 王の時代から100年もしくはそれ以上の間隔をあけて dng がエジプトに連れてこられている。また、この文章以外に dng はほとんど出てこない<sup>8)</sup>。Pepi 二世の Herkhuf に対する称賛や dng を連れてくるときの注意の入念さは、dng が特別な存在であることを示している。

小人症の人たちはエジプトでも普通に存在しているので、小人症の人たちにこのような特別な関心を示すとは考えにくい。そのため、通常の体の小さな人とは違う可能性が高いということで、これが dng をピグミーとする理由ともなっている。

もう一つは神の踊りを踊るということであるが、これを考えるには古代エジプトにおける小人症の人たちの社会的地位や役割とコピトの神を含めて考える必要があるので、後述する。

### 4. 地理

#### (1) Yam

Herkhuf の文章には dng と関係する土地の名前があり、それは Yam、霊の国、Punt である。それぞれがどこを指しているのか、その研究の変遷を追ってみる。まず、Yam について取り上げる。Yam は Herkhuf が訪れた南方の土地である。

Yam がどこに位置するかを考えるために、Breasted (1906) の中で上記の文章以外に Yam が出てくるところを示す。Breasted (1906) は当時解読されていたヒエログリフの文章の翻訳を多く載せているが、Yam が出てくるのは第6王朝の Pepi 一世、Mernere、Pepi 二世の連続した三代の治世の文章で、この時期のみに用いられたようである。Pepi 二世で Yam が出てくるのは上で述べた文章のみである。

Yam は、Pepi 一世がベドウィンとの戦争のために軍隊を形成する話で登場する。Pepi 一世はその兵士を Yam の黒人の間からも集めているという記述である（Breasted, 1906 : 142）。Yam の地がこの時期エジプト王国の影響下にあったことがわかる。

次に、Mernere 王の時代の最初のものを紹介する。王は南に5つの運河を掘り、3つの貨物船とアカシアの木でできた引き船を作らせるために部下を派遣した。そのとき、Irthet、Wawat、Yam、Mazoi の黒人の長はそのために材木を切り、その部下は一年で仕事を成し遂げた、という話である (Breasted, 1906 : 149)。ここでも Yam はエジプト王国の影響下にあることがわかる。

残りは Harkhuf の4回の南方への探検のうちの最初の3回に出てくる。最初の探検で、彼は彼の父とともにこの地方への道を探るために Iri から Yam へと派遣されている。彼は7か月でこれを成し遂げ、たくさんの種類の贈り物を持って帰り、王に称賛された (Breasted, 1906 : 152)。2回目の探検では、Elephantine から Irthet、Teres、Irtheth に行き、たくさんの贈り物をこれらの地から持ち帰った。8か月の旅であった。彼は Sethu と Irthet の長の住んでいる国を探検した後に、帰ってきた。いかなるキャラバンの指揮者もこれ以前に Yam まで進んだことはない (Breasted, 1906 : 153)。3回目の探検では、彼は Uhet からの道を通って進んでいき、Yam の長を発見している。Yam の長は Temeh という集団を滅ぼすために西方の天国の端くらい離れている Temeh の国へと向かっていて、Harkhuf は彼の後を追って Temeh の国へ入り、Yam の長を鎮圧している。そこは Irthet の南で Sethu の北であったようだ。そして300頭のロバに香料、黒檀、ヒョウ、象牙などの産物を背負わせて持ち帰っている。Yam の軍勢はとても強く、兵士の数も多いという (Breasted, 1906 : 153-154)。

Schiaparelli (1892) では Yam は Amam と表記されている。彼は Hirschuf (Herkhuf) が Amam まで7、8か月の旅をしていることからエジプトの近くではないとし、またヒョウの毛皮や象牙などは赤道アフリカの産物であること、Elephantine からハルツームまではナイル川の西は砂漠で人が住んでいないことから、コルドファンからダルフル、ワダイの地域が Amam ではないかと推定している (Schiaparelli, 1892 : 26-28)。

Maspero (1893 : 429) では Yam は Amami と表記されている。彼はそこをナイル川の第二瀑布<sup>9)</sup>の北部のナイル川から西のヌビアの砂漠の地域であると述べている (Maspero (1894 : 395) に地図が記載。)。Maspero は dng が偶然そこにただけで、商取引や戦争もしくは狩猟のために死者の霊の国から来ていたと述べている。このように、Maspero は赤道からかなり離れたエジプトに近い北の地域を想定している。

ドイツ人エジプト学者 Erman もこの話についていくつかの論文を書いている。Erman (1992a) では、Schiaparelli から手に入れた写真をもとにこの文章を翻訳し、解説を加えている。ただし、その写真はかなり不鮮明で (Breasted, 1906 : 151)、かなりの部分が抜けている。彼はこの地を Imam と表記している (Erman, 1892a : 575。Erman, 1892b : 79も同様)。彼はこの地はヌビアではなくハルツームもしくはベルベル人の住むあたりであると述べている (Erman, 1892a, 577)。多分、Maspero の意見に反論しようとしてヌビアではないと述べており、Maspero よりもさらに南の土地を想定しているようである。一方でその後に出た Erman (1893 : 65) では Yam としており、より正確な資料に基づいて表記を変更している。ただし、この論文には Yam の位置についての記述はない。

1900年に出版された Keane (言語学や民族学を専門とするアイルランド人) の著作には Yam は出てこず、Yam と思われる場所は「大きな木々の国 the land of great trees」となっている。場所はエジプトから南の方向の離れた場所とされている (Keane, 1900 : 118)。Keane は参考文献に Schiaparelli (1892) をあげているが、それには「大きな木々の国」という表現はない。Mernere 王の時代に船を作るために Yam の王が木材を提供したという話から

木が生えている土地であると推定したとしか考えられない。上述のように、Schiaparelli は Yam (Amam) の場所を推定しているのだが、奇妙なことに Keane (1900) にはその具体的な場所の記載は存在しない。Keane は Schiaparelli の原文を読んでおらず、Schiaparelli の本を引用したものをさらに部分的に引用しているのかもしれない。ただし、この Keane の著作が1900年からしばらく後のエジプト学者以外の人たちの論文に引用されており (Smith, 1905: 426; Shrubbsall, 1908: 983)、「木々の国」という解釈はここからピグミー研究者に広まった可能性が高い。

20世紀中頃以降にも Yam を位置付けている論文がいくつかあるが、ここでは簡単に紹介する。Gardiner (1947) はナイル川の第一瀑布と第二瀑布の間、Yoyotte (1953: 176) はアスワンから南西に延びる道上にあるオアシスの町 Dunkul, Edel (1955) と Kemp (1983) は現在のスーダンのナイル川第3瀑布のすぐ南の Kerma を Yam としている。一方、Dixon (1958) は北緯22度より南ではありえないと述べるにとどまり、場所を特定をしていないが、Yoyotte と Edel の説を否定している。Gedicke は、Yam はナイル川の溪谷ではなく、Abydos (ナイル川沿いの上エジプトの古代都市) と Elephantine の西の、Kharga や Dunkul, Kurkur などのエジプト南部のオアシスを含む広い範囲を意味しているとした (Gedicke, 1981: 18)。O'Connor (1986) はアトバラからハルツームの間のナイル川に沿った場所と、かなり南に位置づけている。

このように Yam がどこかということに定説はないが、それは「大きな木々の国」といったような漠然とした場所を表しているのではなく、Herkhuf が直接探検したエジプトの南方の人が住んでいる具体的な土地の名前である。当時のエジプト王国の影響を受けていること、交易がおこなわれていること、Herkhuf によって Yam の軍勢が鎮圧されていること<sup>10)</sup>、さらに先行研究を参考にすると、最も南を想定したとしてもハルツームよりも北であることは間違いないだろう。Herkhuf の記述からすると、Gedicke が述べているようにある程度広い範囲を指しているとも考えられる。Schiaparelli の推定はエジプト王国からの影響についての部分の解釈が不十分なため、そして Amam とピグミーと結びつけようとしたため、極端に南方に位置づけていると思われる。エジプト学者の文献ではこの Yam という名称が定着しており、Keane の「大きな木々の国」はエジプト学の専門家以外の人が用いているにすぎない。

Yam は、最も南を想定した場合には、次に述べる Punt ほど現在のピグミーの居住地から遠いわけではないかもしれないが、dng がもしピグミーであるなら、かなり稀な存在であったのも当然であろう。

## (2) Punt

Herkhuf の碑文の中では Punt は Isesi 王の時代に dng が連れてこられた場所とされている。

Schiaparelli (1892: 34-35) では Punt はソマリアの沿岸部であるとしている。

Maspero は Punt を Pounit もしくは Pouanit、Pûanit と表記している。彼は当初はエジプトの南東の地方でマンデブ海峡(紅海とアデン湾の境界にあたるイエメンとジブチの間の海峡)の両岸であるとし、エジプト人はそこから昔から香料を取り寄せていたという (Maspero, 1889: 143)。しかし、Maspero (1893: 430) では、エジプトの南で紅海の沿岸であると述べている。さらに翌年出版された Maspero (1894: 396-397) ではナイル川と紅海の間で象牙、黒檀、金、金属、樹脂が豊かな土地であるとされる。また、Krali の論文を引用して、Suakim (北東スーダンの紅海沿岸の町、北緯19度6分、東経37度20分) からベルベル人のと

ころに引いた線からアビシニアの山のふもとまでであるともされている。また、この名称はのちに紅海のすべての沿岸やソマリランド、さらにはアラビア半島の一部にまで拡大されたという。この著作でも交易について記述されている。Masperoの記述は著作ごとに微妙に異なるが、北緯19度から南の紅海からナイル川の間で、エジプトと頻繁にはないにせよ交易を行っていた地域と考えている。

Sergi (1901) は Punt の位置についてのそれまでの研究をまとめている。それによると、Punt がどこに位置するのかを決定するのは難しく、エジプトの文章をどう解釈するかによって、多様な意見が存在しており、エジプト南部、ソマリランド、アラビア半島、もしくはこれらの土地全体を指すといった考えが存在するという。ただし、彼は結論としては Punt はアラビア半島を含まず、アフリカ大陸側にあると結論している (Sergi, 1901 : 84-86)。

Breasted (1906) に Punt は上記のものを除いていくつか出ており、第 6、11、12 王朝のものがあるが、すべて紅海から船で行くところにある (Breasted, 1906 : 162-164; 209-210; 275)。

20世紀後半の研究では、Kemp (1983) は Punt は紅海の沿岸で、最も可能性の高いのはスーダンとエリトリアの国境あたり、Dasen (1988 : 259) では「おそらくエリトリアの地域」とされている。

このように、Schiaparelli (1892) を除いて、Punt は紅海のアフリカ大陸側の沿岸であるということで研究者の意見は一致している。Schiaparelli (1892) では Yam と同じようにピグミーと結びつけるためにかなり南方に位置づけたのだろう。dng がピグミーだとしたら紅海沿岸までのかなりの距離を旅したことになるが、その可能性については何とも言えない。

### (3) 霊の国？

Yam も Punt も dng がエジプトにやってきた経由地であり、dng がもともと住んでいた土地は Breasted (1906) では「霊の国 the land of spirits」であり、これがどこなのかが最も重要である。ただし、Breasted (1906) ではこの土地について全く説明していない。

Schiaparelli (1892 : 20) はこの地を「神聖な霊の国 Terra degli Spiriti beati」と訳している。さらに彼はこの地が Amam よりも南ということで北緯10度よりも南であり、エチオピアのオモ川下流域あたりに住んでいると当時は考えられていた Doko というピグミー（現在は存在しないことが確認されている）が Donka (dng) ではないかと述べている (Schiaparelli, 1892 : 30-34)。ただし、彼はこの地をピグミーがいる場所であるという前提で推定しており、碑文の文章の中にそのような証拠があるわけではない。

Maspero はこの地を「死者の霊の国 Terre des Mânes」としている。彼はこれを「靈魂の島 île de double」と同じようなものであると考えている。この「靈魂の島」は地理的な領域の一番端の境界に位置し、エジプト人にとって途方もない存在が住みつくところであった。その地域は、神々が住んでいて世界を取り囲んでいる越えられない山に隣接しており、いわば天と地の中間の領域であり、そこでは生きている人は亡くなった人の魂と接触できる。Maspero は dng 自身は超自然的な存在ではないとしながらも、超自然的な存在や死者の霊もしくは靈魂がたくさん存在する場所から来ており、そのことが dng に価値を与えているとしている。dng はそのような土地に住む半野蛮状態のコピトの部族であり、醜い顔と野蛮な仕草はエジプトの神 Bes を思い出すという。Maspero は、ここを現実の世界ではなく、古代エジプト人の想像上の遠い世界のことであると、そのことが dng に神秘的な価値を与えており、またこ

れが神の踊りとも関係していると考えている (Maspero, 1893 : 430-431)。

Erman もこれを「霊の国 Geisterlande」としているが、これが何かまたこれがどこかの説明はない (Erman, 1892b, 1893)。

Keane (1900 : 117) は「靈魂の島 Island of the Double」から dng がやってきて、そこは Punt の先にある想像上の死者の霊の国であるとし、Maspero の説明と違いはない。

これらの解釈に異議を唱えたのがフランスの言語学者 Kuentz である。Schiaparelli や Maspero が「死者の霊の国」としたヒエログリフの文章は図 2 (a) である。8 文字のうち、後半の 6 文字が「死者の霊」を表している。また、Erman (1893) では 5 番目が「ウズラのひな」ではなく図 2 (b) の「エジプト・ハゲワシ」になっているが、同じように「霊の国から aus dem Geisterlande」と訳している。1903 年に出版された Sethe の Urkunden des Alten Reichs では、Herkhuf の碑文がより完全な形で再現され、この 5 番目の文字はウズラのひなではなく図 2 (c) のノスリの仲間であるとされた。このため、本来ならこれまで「死者の霊」と訳されていた単語の再検討が必要だったのだが、それがなされていなかった (Kuentz, 1920 : 131-134)。

もう一つ Kuentz が議論しているのが最後の 3 つ並んだ文字で、これはすべて決定詞である。これは図 2 (d) と混同されていた。図 2 (d) は髭があり東洋の形式で座っている人を表し、神性もしくは神聖な死者の一般的な決定詞として用いられているが、しかし、その使用は中王国以降で、古王国の時代には使われていない。図 2 (a) の決定詞はアジアもしくはアフリカの「未開」な人たちの名前に適用されている例がある (Kuentz, 1920 : 136-137)。

これらのことから、Kuentz はこれが「死者の霊の国」のような想像上の場所ではなく、アフリカの黒人が住んでいる現実的な場所であるとした。そして、図 2 (e) は「地平線」に由来する形容詞が複数名詞化されたものであり、「地平線の人たち」とでも訳され、図 2 (a) の最初の 2 文字を加えると「地平線の人たちの地」という意味になるという (Kuentz, 1920 : 138)。

その具体的な場所を Kuentz は推定しているがかなり漠然としている。それは当時のエジプト人が知っていた東方および南方の限界の地域であり、現在のアラビア砂漠、エリトリア、エチオピア、コルドファンが対応しているという (Kuentz, 1920 : 146-147)。そして、そこは Akhit という土地である (Kuentz, 1920 : 189)。

この Kuentz の Akhit という解釈はエジプト学者の Dawson、El-Aguizy、Dasen も受け入れており、「死者の霊の国」という解釈は現在では成り立たない (El-aguizy, 1987 : 54; Dawson, 1938 : 185; Dasen, 1988 : 259)。とはいえ、Akhit の具体的な場所については Kuentz の主張にさして根拠があるわけではなく、おおざっぱな推定に過ぎない。Dasen はこの Akhit の場所は部分的には伝説的な場所ではないかとしている (Dasen : 1988 : 259)。

## 5. 神の踊り

Herkhuf の碑文では、dng は王を喜ばせるために王の前で神の踊りを踊ることが期待されており、王もそれをとても望んでいることが読み取れる。一方で、中部アフリカのピグミーは独特の歌と踊りを持つことが知られており、ピグミーの踊りと Herkhuf の碑文の神の踊りが結び付けられることもある (北西, 2013)。ここではこの神の踊りについて取り上げるが、その材料となるのは小人症の人の地位と役割、およびコピトの神である。

古代エジプトでは小人症は病気とは認識されておらず、外見が注目を集めるものの差別的な



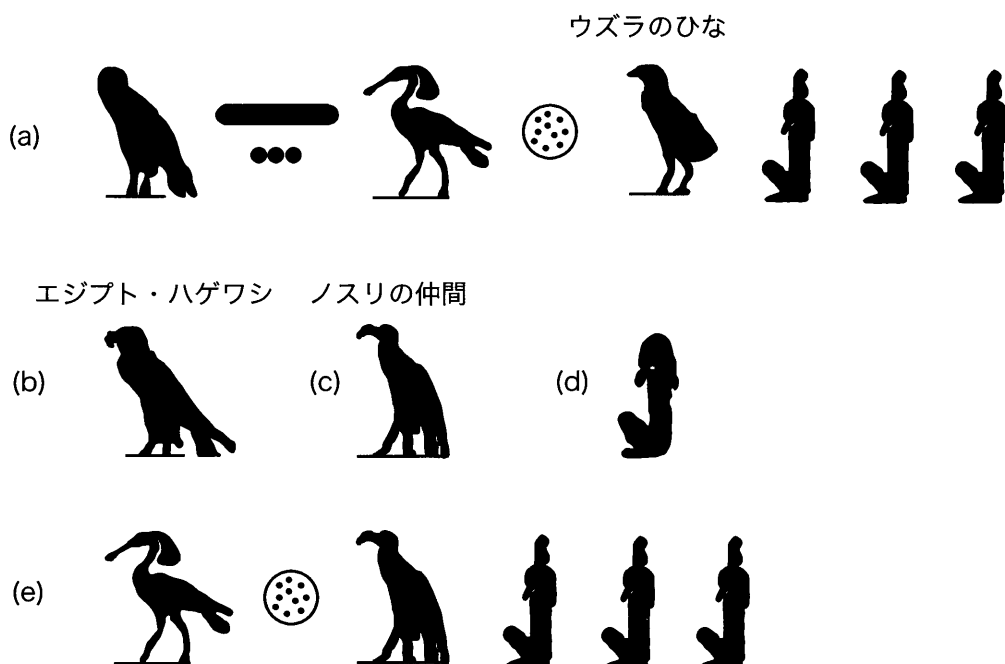


図2 霊の国もしくは Akhit

社会的地位にあったわけではないようである。古王国時代において、小人症の人は、家畜（犬やロバ）の世話をしたり、葬式の備品を持つような多様な任務を持つ召使い、または宝石類を扱う作業をしていた。一方で第6王朝の Seneb のように宮廷で高い地位につく人もいた (El-Auizy, 1987 : 55-56; Dasen, 1988 : 261-263)。

小人症の人は神殿や墓での葬式に関わるアクロバティックな儀礼的な踊りに関係していたようである。この踊りは墓の出入り口で雄牛の埋葬の日に演じられることになっていた。この雄牛は太陽神の使者である聖なる牛である。Djeho は第13王朝の時代の人で、彼の肖像画は軟骨形成不全症の特徴を示しているが、彼がそのような踊りを踊ることを望んだとされている (El-Aguizy, 1987 : 56, 59; Dasen, 1988 : 268)。

ここで問題となるのは太陽神と小人症の人の関係である。Ptah 神は職人の守護神で、主に均整のとれた体型の成人の形で知られているが、新王国の時代には軟骨形成不全症の姿をしたコビトとして表現された。コビトの Ptah 神は、太陽神の一つの形態で特に朝の側面を表しているコガネムシ Khepri をしばしば身に付けており、呪文によって太陽の特性を与えられている。

Bes 神も軟骨形成不全症の体型をしていて、新王国時代および末期王朝時代、さらにギリシャ・ローマ時代に人気を博していた。この神はヘビやその他の害獣から身を守ったり、妊娠や安産をもたらす能力があるとされていた。Bes 神の頭はライオンの姿をしており、夜の太陽と関係しているとされる (El-Aguizy, 1987 : 58-59; Dasen, 1988 : 265)。

El-Aguizy は神の踊りを踊る dng と、のちの時代の太陽神と結びついた小人症の人の踊りやコビトの姿をした Ptah 神と Bes 神を結びつけている。彼は、「コビトの呪術的な側面は末期王朝の記録においてはっきりと表れるが、より早い時代、特に古王国の時代に起源があるに違いない。太陽とコビトの同化を心に留めておくと、アフリカのピグミーによって王や神の前で演じられた聖なる踊りの重要性が理解できる。これらの踊りは何らかの形で太陽神に関係して

おり、それはその踊りが神の前で行われたためか、ピグミーが太陽の象徴と考えられたためだろう。」と述べている (El-Aguizy, 1987: 59-60)。つまり、彼はのちの時代の小人症の人たちの聖なる踊りや太陽神との関係の起源が、ピグミー (dng) の神の踊りである可能性を主張している。

ただし、これは違う方向で考えることもできる。古王国時代にすでに小人症の人たちが聖なる踊りや太陽神と関係があり、神の踊りを踊らせるために遠く離れた場所の体の小さな人 (ピグミーかもしれないし、小人症の人かもしれない) をエジプトに住む小人症の人とは違った珍しい存在として探していたということである。古代エジプトにおける少なくとも一部の小人症の人たちの高い社会的地位から考えると、私には後者のほうがありそうに思える。

## 6. まとめ

本稿は、Herkhuf がエジプトの南方から dng と呼ばれるコピトを連れてきたという話がエジプト学によってどのように解釈されてきたのかについて述べてきた。簡単にまとめてみると、(1) dng と呼ばれる人は体が通常の人よりも小さいということはすべての研究者が認めており、また多くの研究者がそれをピグミーであると考えているが、一部の研究者はピグミーの可能性はあるが確実にそうであるかはわからないという立場をとっている、(2) dng はとても稀で特別な存在である、(3) dng が Herkhuf によって発見された土地は Yam という名前で、その具体的な場所は研究者によって異なるが樹木の国というような抽象的な場所ではなく、エジプトの南方でハルツームよりも北の場所である可能性が高い、(4) Herkhuf の100年前に Punt から同様の dng が連れてこられているが、Punt は紅海のアフリカ大陸側の沿岸である、(5) dng が住んでいた土地は「霊の国」のような空想的な場所ではなく、当時のエジプト人が想定した地平線の果てにある Akhit という名称の土地である、(6) dng は神の踊りを踊るが、それは当時の小人症の人たちの役割と関係しており、エジプトに連れてこられたピグミーが神の踊りを踊ることからそれがエジプトの小人症の人に波及したか、逆にもともと小人症の人にそのような役割が与えられていて遠くから来た体の小さな dng にも同じ役割が期待されたのかは両方の可能性がある、といったことである。

ここで述べた Herkhuf の話はピグミーの本の冒頭によく見られる古代エジプトとピグミーの関係に一致する部分があるものの、全く異なっている部分も多くある。異なった研究分野の間で全く情報が伝わっていないことは驚きでもある。北西 (2013) ではピグミー研究者の間でこの話がどのように伝えられ広まっていったのかについて述べていきたい。

## 注

- 1 : より最近のものとしては、Lichtheim (1973: 26-27) にその時点までの研究に基づいた全文が掲載されている。こちらのほうが Breasted (1906) よりも正しいが、研究の変遷を見るために古いものを取り上げた。
- 2 : Pepi 二世の治世の二年目の年の意味。
- 3 : Pepi 二世の別名、Neferkare と表記されることが多い。
- 4 : 霊や精霊と訳されるが、本稿では古代エジプトの霊や魂、命の概念には立ち入らない。
- 5 : この人が誰かという解釈も論文によって変化していくのだが、dng とは関係ない。Dasen (1988: 259) では封印紙の運搬人 Werdjedeba となっている。
- 6 : Maspero (1893) では Assi、Vycichl (1957) では Yzzy と表記されている。第5王朝の

王で在位は紀元前25世紀から24世紀。

- 7：ヒエログリフの単語をアルファベットに転写するときには厄介な問題が存在する。ヒエログリフの言語では母音が表記されないため、アルファベットでも子音のみで表記されることもあるが（例えば dng）、子音の間に母音を補うこともある。その一例が Herkhuf で、これをヒエログリフの文字を忠実に反映したエジプト学の表記法で表記すると hr-hwf となる。どの母音を補うかは異なることもあるので Herkhuf は Hirkhouf や Harkhuf と表記されることもある。さらに複雑にするのはエジプト・ハゲワシのヒエログリフの音はヘブライ語のアレフに近い音であり、エジプト学では 3 で表記されるが一般向けの本では a で表記され、また前腕のヒエログリフの音はエジプト学では ‘ で表記されるが一般向けの本ではこれも a で表記される。このように違う子音が同じ母音で表記されたり、さらに補われる母音が表記されることもあり、混同が生じる可能性があるが、本稿は一般向けの表記をとることとし、原文でエジプト学の表記のものは一般向けのものに置き換える。
- 8：他には Pepi 一世のピラミッドの文章に神の踊りを踊る dng が出てくる (Lichtheim, 1973 : 48)。
- 9：現在アスワンハイダムによってできたナセル湖に沈んでいる。北緯21.48度、東経30.97度。
- 10：Dixon (1958 : 46) は Herkhuf が Yam の軍勢を鎮圧したのではなく、平和的友好的関係のもとで Yam の人が Herkhuf を案内したと述べている。

## 参考文献

- Breasted, J. H. 1906. *Ancient Records of Egypt*. Vol. 1. The University of Chicago, Chicago.
- Breasted, J. H. 1908. *A History of the Ancient Egyptians*. Charles Scribner's Sons, New York.
- Dasen, V. 1988. Dwarfism in Egypt and classical antiquity: iconography and medical history. *Medical history* 32: 253-276.
- Dawson, W. R. 1938. Pygmies and dwarfs in ancient Egypt. *Journal of Egyptian Archaeology* 24 (2): 185-189.
- Dixon, D. M. 1958. The land of Yam. *The Journal of Egyptian Archaeology* 44: 44-55.
- Edel, E. 1955. Inschriften des Alten Reiches: V Die Reiseberichte des Hr-w-hwjjf. In (Firchow, O. ed.) *Ägyptologische Studien*. Akademie-Verlag, Berlin.
- El-Aguizy, O. 1987. Dwarfs and Pygmies in ancient Egypt. *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 71: 53-60.
- Erman, A. 1892a. E. Schiaparelli, Una tomba egiziana inedita. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 46: 574-579.
- Erman, A. 1892b. Zu den Inschriften des Hr-hwjjf. *Zeitschrift für Ägyptische Sprache* 30: 78-83.
- Erman, A. 1893. Der Brief des Königs Nefr-ke<sup>3</sup>-re<sup>c</sup>. *Zeitschrift für Ägyptische Sprache* 31: 65-73.
- Gardiner, A. H. 1947. *Ancient Egyptian Onomastica* Vol. 1. Oxford University Press, London.
- Goedicke, H. 1981. Harkhuf's Travels. *Journal of Near Eastern Studies* 40 (1): 1-20.

- Keane, A. H. 1900. *Man, Past and Present*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Kemp, B. J. 1983. Old Kingdom, Middle Kingdom and Second Intermediate Period c. 2686–1522 BC. in (Trigger B. G., B. J. Kemp, D. O'Connor & A. B. Lloyd eds.) *Ancient Egypt: A Social History*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 北西功一 2013 「古代エジプトとピグミーの関係～ピグミー研究者の視点を中心として～」『山口大学教育学部研究論叢』63(1): 69-82。
- Klieman, K. A. 2003. “*The Pygmies Were Our Compass*” *Bantu and Batwa in the History of West Central Africa, Early Times to c. 1900 C.E.* Heinemann, Portsmouth.
- Kuentz, C. 1920. Autour d'une conception égyptienne méconnue: l'Akhit ou soi-disant horizon. *Le Bulletin de l'Institut Français d'Archéologie Orientale* 17: 121-206.
- Lichtheim, M. 1973. *Ancient Egyptian Literature, Vol. I: The Old and Middle Kingdoms*. University of California Press, Berkeley.
- Maspero, G. 1889. *Les Contes Populaires de l'Égypte Ancienne*. J. Maisonneuve, Paris.
- Maspero, G. 1893. *Études de Mythologie et d'Archéologie Égyptiennes*. Vol. 2. Ernest Leroux, Paris.
- Maspero, G. 1894. *Dawn of Civilization: Egypt and Chaldæa*. Society for Promoting Christian Knowledge, London.
- 松本弥 2012 『ヒエログリフを書いてみよう読んでみようー古代エジプト文字への招待』白水社。
- O'Connor, D. 1986. The locations of Yam and Kush and their historical implications. *Journal of the American Research Center in Egypt* 23: 27-50.
- Schiaparelli, E. 1892. *Una Tomba Egiziana Inedita della VI<sup>a</sup> Dinastia con Iscrizioni Storiche e Geografiche*. Tipografia della R. Accademia dei Lincei, Roma.
- Sergi, G. 1901. *The Mediterranean Race: A Study of the Origin of European Peoples*. Walter Scott, London.
- Sethe, K. 1933. *Urkunden des Alten Reiches* Vol. 1. J. C. Hinrichs'sche Buchhandlung, Leipzig.
- Shrubsall, F. C. 1908. The Bunterian Lectures on the Pygmy and Negro races of Africa. *The Lancet* 171, 4414: 983-986.
- Smith, G. E. 1905. Notes on African Pygmies. *The Lancet*, 166, 4276: 425-428, nil, 428-431.
- Yoyotte, J. 1953. Pour une localisation du pays de IAM. *Bulletin de l'Institut Français d'Archéologie Orientale* 52: 174-177.